

## 「新しい女 (die Neue Frau)」たちのその後

### —— イルムガルト・コイン『この夜を越えて』について (R. Tamaru) [J]

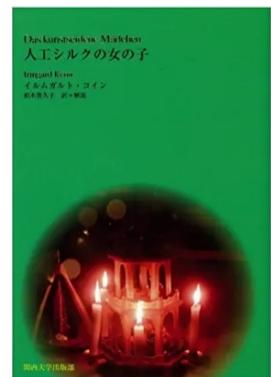
日本語で書かれたドイツ文学史の本を開いても、ヴァイマル時代に活躍した女性作家、イルムガルト・コイン Irmgard Keun (1905-1982) の名前は出てこない。ヴァイマル共和国末期には数多くの女性作家が活躍していたが、その中ではマリールイーゼ・フライサー Marieluise Fleißer (1901-1974) については戯曲がすこしばかり言及されているものの(ただしフライサーの珠玉の散文作品は見過ごされている)、ドイツ語圏では近年その作品の出版が相次ぐガブリエレ・テルギット Gabriele Tergit (1894-1982) や、第二次世界大戦後も継続して人気の高い詩人のマーシャ・カレコ Mascha Kaléko (1907-1975) の名もほとんど見かけない。

さいわいなことに、コインのデビュー作『ギルギ —— わたしたちのひとり (Giligi – eine von uns)』(1931)と彼女の代表作『偽絹の女の子 (Das kunstseidene Mädchen)』(1932) は、柏木貴久子さんによって訳され、それぞれ『人工シルクの女の子』(関西大学出版部、2013)、『オフィスガールの憂鬱 ギルギ、わたしたちのひとり』(関西大学出版部、2016)として日本語で読むことができる。

今回、わたしはコインの亡命期の作品『真夜中過ぎに (Nach Mitternacht)』(1937)を翻訳する機会に恵まれ、邦訳されたコインの作品はこれで三作になった(邦題『この夜を越えて』左右社、2022年)。これは本企画の発案者である左右社の編集者、堀川夢さんに負うところが大きい。ドイツ文学研究者が作品や作家をおもしろいと叫びつづけても、残念ながら、なかなか一般読者には届かない。『この夜を越えて』の出版は、ドイツ文学にも通じたジェンダーセンシティブな編集者と研究者による共同プロジェクトと言えるだろう。文学作品は研究者のものではない。研究者にいじくりまわされる前に、読まれなければならない。

『この夜を越えて』(以下、同タイトルを用いる)に描かれているのは、フランクフルト・アム・マインの1936年3月16日、17日の二日間である。総統来訪に騒然とする町の様子が、それを観察する19歳の主人公ザナの視点から語られている。

ヒトラーやゲーリングといったナチの大物たちによるイベント終了後に宴会が催された酒場では、突撃隊員(SA)と親衛隊員(SS)がいみ合い、魅力的なゲルティ(ザナの親友)は、彼女に声をかけてきた親衛隊員にじぶんはユダヤ人だと挑発する(実際には彼女はユダヤ人ではなく、彼女の恋人がユダヤ人)。ナチ女性団に属するおばに密告され



たことが契機となり、ザナはケルンから小説家の兄アルギンを頼ってフランクフルトにや  
って来たのだが、かつてはナチに批判的であったアルギンは、ナチ政権下で作家として生き  
ていくために、かれらに擦りよろうとしている。

そうした中、作家コインの声を代弁していると思われるのが反ナチの姿勢を貫く、ジャー  
ナリストのハイニィである。かれは体制におもねる作家ばかりではなく、アクチュアルなテ  
ーマを避け、歴史に題材を求める反ナチ作家に対しても手厳しい<sup>1</sup>。作家としての態度を決  
めかねているアルギンに向かって、ハイニィは言う。

今度は歴史小説を書こうというのかい？ いまどき歴史小説を書こうなんていうの  
は意気地なしだ。作家というものは、ペンを執ったら、みずから記す文章も神も世界  
もおそれてはならない。臆病者は作家とはいえない。

だがそれはそれとして、そもそもきみは用なしだ。独裁国家になったことでドイツ  
はいまや完璧な国になった。完璧な国に作家はいらない。楽園には文学はない。欠け  
ているところがなければ、小説家も詩人も存在しない。生粋の抒情詩人には完全への  
憧憬が必要だ。完璧なところでは、文学はおしまいだ。批判ができないのなら、きみは  
黙るしかない。……  
(『この夜を越えて』121頁)

物語終盤の舞台となるのは、ザナの兄アルギン宅で義姉が開いたパーティである。そこ  
には突然アルギンを来訪した(ただしかれは留守)ナチを称賛するイギリス人ジャーナリスト、  
ユダヤ人ではなく非アーリア人と言いつけるユダヤ人実業家、その妻でプロイセンの零落し  
た名家の娘(彼女は夫を憎む一方で息子を溺愛する母でもある)、間もなくアメリカに亡命  
する予定のユダヤ人医師、そしてハイニィなど、雑多な面々が集まっている。途中、ザナを、  
恋人のフランツがケルンから訪ねてくる。フランツはかれと友人のパウルを陥れた突撃隊  
員の男を殺害し(実際にはその生死は不明)、逃げてきたと言う。そしてかれらが列車に乗  
りフランクフルトからオランダに向かうところで物語は終わる。

この最後の場面は小説の原題通り1936年3月17日から18日かけての「真夜中過ぎ」に  
設定されている。コインがドイツからベルギーのオステンデに亡命したのが1936年5月4  
日、そして本作品の出版が1937年初頭であることを考えると、小説『この夜を越えて』で  
は、第二次世界大戦前夜の、ほぼリアルタイムのドイツの状況が描かれているといえる。だ  
からこそ、オランダがその後、ドイツに占領されたことを知る現代の読者は、希望をもって

---

<sup>1</sup> コインは、危機の時代だからこそアクチュアルなテーマを取り上げることが重要だと考  
え、当時の反体制作家たちが歴史的題材を扱った作品を執筆することを、繰り返し批判し  
ている。Vgl. Brief an Arnold Strauss vom 23. Mai 1936. In: Irmgard Keun: Ich lebe in einem  
wilden Wirbel. Briefe an Arnold Strauss 1933 bis 1947. München: Deutscher Taschenbuch Verlag,  
1990. S. 173., Bilder aus Emigration (1947). In: Das Werk. Band 3. Texte aus der Nachkriegszeit  
und der Bundesrepublik 1946-1962. Im Auftrag der Deutschen Akademie für Sprache und Dichtung  
und der Wüstenrot Stiftung herausgegeben von Heinrich Detering und Beate Kennedy. Göttingen:  
Wallstein. 2017. S. 71f.

オランダを目指すかれらにやりきれなさを覚えるのだろう。

2000 年以降、ヴァイマル共和国時代の女性作家たちの作品ばかりでなく、彼女たちがナチ時代に亡命地で執筆した作品も新たに編纂、発表されている<sup>2</sup>。これらの作品では共通して、たとえばユダヤ系の住民への周囲の人々のふるまいの急速な変化、ナチ党员らの理不尽な行為が社会でしだいに幅を利かせる様子が描かれ、読んでいる側は息苦しくなってくる。が、その一方で、こうした事態の行く末についてはどの作品もオープンなままだ。むしろそこにこそ、その時代のリアルを感じる。終わりの見えない暗澹たる状況の渦中にあっても、あるいはそれが深刻であればあるほど、この先について予断することはできない。それは絶望の決定づけを先に延ばすことでもあり、また、かすかな希望を抱きつづけることでもある。

田丸 理砂（フェリス女学院大学）

---

<sup>2</sup> Vgl. Irmgard Keun: *Das Werk. Band 2. Texte aus dem Exil 1933-1940*. Im Auftrag der Deutschen Akademie für Sprache und Dichtung und der Wüstenrot Stiftung herausgegeben von Heinrich Detering und Beate Kennedy. Göttingen: Wallstein. 2017., Ilsa Barea-Kulcsar: *Telefônica*. Herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Georg Pichler. Wien: Edition Atelier. 2019. (1939 年に亡命先のイギリスで完成、1949 年にウィーンの *Arbeiter-Zeitung* に連載、書籍化は今回が初めて), Maria Leitner: *Elisabeth, ein Hitlermädchen*. Berlin: AvivA Verlag. 2014. (1937 年に *Pariser Zeitung* に連載、第二次世界大戦後は DDR で書籍として出版), Alice Rühle-Gerstel: *Der Umbruch oder Hanna und die Freiheit*. Ein Prag-Roman. Berlin: AvivA Verlag. 2007. (執筆時期は 1937 年末から 1938 年春、初出版は 1984 年), Victoria Wolff: *Gast in der Heimat*. Herausgegeben und mit einem Nachwort von Anke Heimberg. Berlin: AvivA Verlag. 2021. (1935 年にオランダの亡命出版社 Querido から上梓), など。

0191

作成日 : 2023/01/11